

[38]文學研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2339117>

出版情報：文學研究. 38, 1949-12-20. The Kyushu Literary Society
バージョン：
権利関係：



彙報

九州大學文學部文學關係講義題目

昭和二十三年度第二學期(自二三・一一)至二四・一三)

小島吉雄教授

國文學の小島吉雄教授は二十四年四月一日付を以て大阪大學教授となられ同時に兼任九州大學教授と發令せられた。

九州文學會談話會

文學形式論

昭和二十三年九月十八日

シュトルムについて

昭和二十三年十二月十八日

落筆物語

昭和二十四年二月九日

金瓶梅

昭和二十四年三月十日

伊勢物語

昭和二十四年四月二十三日

ルソー「懺悔錄」

昭和二十四年九月二十二日

中山教授

於小會議室

國松教授

於進藤教授宅

小島教授

於進藤教授私室

目加田教授

於春日博士宅

福田助教授

於大會議室

永田講師

於小會議室

國文學・國語學

與謝野晶子論

(講讀) 新古今集

(演習) 奥の細道

(特殊講義) 國語史

(演習) 萬葉集

中國文學

中國文藝論

西廂記

英文學・英語學

英文學史

(演習) シェイクスピア

(講讀) スペンサー

(英文學) (ワーツワース)

(講讀) (スチーヴンソン Treasure Island)

(演習) マシューアーノルド「教養と無秩序」

佛文學

サントブーヴ研究

(演習) ラファイエット夫人「フランセス・ド・クレウ」

小島教授

〃

福田助教授

〃

目加田教授

〃

中山教授

〃

前川助教授

〃

〃

進藤教授

〃

(講讀) アナトール・フランス
「シルウエスト・ルボナールの罪」
(演習) ルソー「夢想」

獨文學

ニーチエの著作

(講讀) ニーチエ・ツアラトウストラ
(講讀) リルケ「Aufzeichnungen des
Malt Lauride Briggje」

言語學

言語學概論

外國語

英語

佛語

佛語初歩

獨語初歩

中國語

中國語初歩

ロシア語初歩

昭和二十四年度第一學期(自二四・四
至二四・十)

國文學・國語學

(特殊講義) 連歌史

(演習) 猿蓑の連句

(特殊講義) 古事記の構造

(演習) 源氏物語

永田 講師

國松 教授

富士川 講師

吉町助 教授

前川助 教授

永田 講師

千代 講師

王 講師

吉町助 教授

小島 教授

福田助 教授

(特殊講義) 日本文法

中學文學

詩經研究

(講讀) 儒林外史

英文學・英語學

(演習) 十九世紀散文

(演習) ミルトン

Ichikawa (ed) Fifty Famous Poems.

英文學概論

英文學

(演習) シエイクスピア「マクベス」

(演習) R. Bridges: Testament of Beauty

(演習) ジキイル博士とハイド氏

佛文學

コルネイユ研究

(演習) モリエール「守鏡奴」

(講讀) サンド・ヴーヴ「月曜評語」

(講讀) アンドレ・モーロウ「風土」

(演習) B. Constant, Adolphe

(講讀) ルソー序説

獨文學

ゲーテの抒情詩集

(演習) ゲーテ西東詩集

〃

目加田 教授

〃

中山 教授

〃

〃

〃

前川助 教授

〃

〃

〃

進藤 教授

〃

〃

〃

〃

永田 講師

〃

〃

國松 教授

〃

(講讀) トーマス・マン小説集
獨文學講讀

言語學

言語學概論

外國語

梵語 初步

ラテン語 初步

ラテン語 初步

佛語 初步

佛語 初步

獨語 初步

ロシア語 初步

英語 初步

中國語 初步

中國語 初步

文學科卒業生論文題目

昭和二十三年八月十五日迄提出

柿本人麿の譬喩法

記紀萬葉に於ける「ハ」の清濁に就いて

シンクレア・ルイズのアメリカ生活研究

シエイクスピアの「ジュリアス・シーザ」に就いて

國松 教授

富士川 講師

吉町助 教授

渡邊助 教授

長澤 教授

デロリエ 講師

永田 講師

〃

千代 講師

吉町助 教授

森岡 講師

影山 講師

〃

瀨里 廣明

石井 和男

田中 博光

西部 房之

昭和二十四年一月十五日迄提出

鈴木朗とその國語意識

西鶴が描いた「人間」について

上代歌論の構成について

啄木短歌の抒情性について

芥川龍之介論

芭蕉の藝術と漢文學

李太白と其の詩について

カールライルの文學觀につき

D・Hロレンス研究

ウィリヤム・ブレイクの品性に就いて

フオーサイト・サアガの研究

ゴールド・スミスの人生觀と作品の特質

トマスハアデイの「ダーバアウイ家のテス」の研究

スベクテーターの研究

チャールズラムと彼のエッセイ

トマスハアデイの諸相

エドガ・アラン・ポーと彼のアメリカの浪漫主義に於ける位置

ゴールズワージー劇研究

ツアラツストラの永却歸郷

人間メーリケの本質に對する一考察への試み

昭和二十四年八月十五日迄提出

吉田 一

毛利 高根

小柳陽太郎

鷗野 泰隆

進來 研二

木庭 立夫

黒木 好江

高野 一徳

小野 龜

田熊一之助

樋川 讓二

中山 憲二

永江 了之

渡部 章

澤山 運平

田中 安隆

山地 正彦

阿波 保喬

久野 眞義

平田 隆男

バルザック研究

九六國文學會

昭和二十三年度

新入會員歡迎會 (四月二十九日)

國文學會總會 (五月十六日)

研究發表

- 一、芭蕉の「荒海や」の句について
- 一、萬葉の「大夫」について

小島 吉雄
福田 良輔

國文學公開講義

自六月五日至六月二十日 (毎週土、日曜日) (六回)

- 一、近松淨瑠璃「心中天の網島」

小島 吉雄

卒業論文發表會 (九月十日)

- 一、人麿の譬喩法

瀬里 廣明

- 一、記紀萬葉に於ける「ハ」の清濁について

石井 和男

國文學會例会 (十二月十一日)

研究發表

- 一、落窪物語の本文に就いて
- 一、菊宣(日本文藝史と佛教との交渉)
- 一、遊仙窟の訓讀
- 一、音讀について

清田 正喜
井手 恒雄
平井 秀文
黒岩 駒男

卒業論文發表會 (三月六日)

- 一、鈴木朗とその國語意識

吉田 一

弓削 三勇

特別研究發表

- 一、文學意識の今日的課題
- 一、落窪物語寫本考(長嘯子室筆本について)

昭和二十四年度

新入會員歡迎會 (五月三十一日)

國文學會總會 (六月一日)

研究發表

- 一、大伴家持をめぐる人々
- 一、言語性の成立
- 一、薩陽方言に於ける接續助詞「サカン」について
- 一、上代形容詞について
- 一、平仲物語論

白木 喬
黒岩 駒男
上村 孝二
東 秀吉
目加田さくを

英文學會

○日本英文學會第一回九州大會 (昭和二十三年十一月二十三日)

大會既に廿回の歴史を有する日本英文學會の地方大會の一つとして第一回九州大會は菊薫る十一月二三日の兩日開催、此の日集る者地元九州は勿論、遠く神戸、大阪、東京に及び、一番教室を以てしても收容しえず遂に十一番教室に變更するという盛會であつた。前九大教授現青山學院長日本英文學會長豊田實博士の開會の辭に始まり九大中山教授の開會の辭に

終つた本大會の研究發表者は次の二十三氏である。

- | | | |
|-------------------------------|---------|-------|
| 1、キーツのエンデイミイヨンについて | 福岡外專教授 | 福岡欣一 |
| 2、シエレの死觀 | 佐賀師範教授 | 水之江有義 |
| 3、トマス・ハーデイの人生觀 | 福岡一師教授 | 花田秀雄 |
| 4、世紀末文學とオスカ・ワイルド | 兵庫師教授 | 才野重雄 |
| 5、アメリカ文藝思潮の行方 | 佐師教授 | 光岡武勇 |
| 6、ヴァーヂニウス・プアリス
クイを中心として | 長崎高校 | 栗田利喜太 |
| 7、デョーロ・ハーバートのザ・テムプル | 九大特研生 | 成瀬正幾 |
| 8、ポーについて | 福岡教授 | 小島信之 |
| 9、エッセイの性格 | 東京工專教授 | 吉松 勉 |
| 10、虛無と文學 | 東京工專教授 | 小松 光 |
| 11、アングロ・サクソンクロニクル(A・D・八五五)の研究 | 第五高校教授 | 河原畑正行 |
| 12、シエイクスピアと近松 | 福岡教授 | 若荷幸也 |
| 13、英語母音の音感について | 久留米工專教授 | 西原忠毅 |
| 14、傾斜格の機能について | 大外專講師 | 林 榮一 |
| 15、シミリ・メタファアの文体論的考察 | 九大助手 | 石井康一 |
| 16、翻譯技術について | 神戸經專教授 | 三戸雄一 |
| 17、浪漫派運動の展開 | 神戸外專教授 | 本多三七 |
| 18、ウィリアム・クーパーとその母 | 九大特研生 | 一力秀雄 |
| 19、ミルトンの女性觀 | 兵庫師範教授 | 植木敏一 |

20、リチャードソンの問題 福岡女專教授 森岡 榮
21、社會學的小説(アメリカ小説管見) 神經大專門部教授 荻野目博道

22、ソマセツト・モームの小説について 長崎經專教授 後藤武士

23、マキャベリズムと「リチャード三世」 五高教授 和田勇一

會終了後圖書館應接室にて豊田博士、中山教授を囲み、卒業生一同懇談會を開く。

○齊藤博士講演(昭和二十四年一月二十日、於工學部大講堂)

東大名譽教授齊藤博士の來福を機に全學講義として「外國文化の攝取について」の講演を開く。博士は周知の如く我が英文學界の耆宿でありその該博なる知識の一端はその著「杜甫」にも窺はれる處であるが烈々の口調に美はしくも熱を帯びた博士の本講演は聴衆に多大の感銘を與へるに十分であつた。終つて本部應接室にて博士を圍んで法文學部教授一同の座談會開催。

○エドモンド・ブランデン氏特別講演(昭和二十四年二月十二日、於リ十七日迄、於二番教室)

目下來朝中の次期桂冠詩人の第一人者を以て目され而も小説家、批評家であるエドモンド・ブランデン氏は中山教授の御盡力により遂に來福を快諾、茲に我等は現英國が誇る老詩人に親しく接するの機會を得た。「シエファード」「アンダートーンス・オヴ・ウォー」の作者ブランデン及びクレア同夫人を迎へた筑紫路は此の日、朝來珍らしくも名残りの大雪ではあつ

たが、眞摯な聴衆は二番教室に溢れ、正に立錫の余地もない盛況であつた。(そして五日間此の盛況が続いた事は當然の事乍ら主催者側としてはこよない欣びであつた)五日間に至る講義題目は次の通りであつた。①、マン・アランド・ネイチュア。②、ザ・ロマンチイックス。③、ザ・エリザベアサンズ。④、ザ・ノーツ・オン・イン格蘭ド。⑤、ザ・シェイクスピア・キヤラクターズ此の外氏は福岡女子高校にて「ザ・プログレス・オブ・イングリッッシュ・リタラチュア」十八日には工學部大講堂にて「ブレゼントデイ・イングリッッシュ・リタラチュア」なる題の下に公開講演をされ、文學通り盛澤山のブランにも不拘終始快よく應ぜられた。茲に深い感謝に満ちたペンを以て特記する次第である。

○卒業生送別會(昭和二十四年三月四日)

本年卒業者の送別會を三畏閣にて開く、席上次の發表を聞く。

○ゴールズ・ワージー

樋川 讓二

○ゴールド・スミス

中山 憲二

以上日本英文學會第一回九州大會、齊藤博士、ブランデン氏講演會と、三つのビツダ・イヴェンツに飾られた我が英文學會の過ぎし一年は正に最良の年でありアンヌ・スミラビリスであつた。

○九大英語夏季大學(九大英文學會主催)

(自八年十八日至三十日法文一番教室)

本年も昨年同様十月に日本英文學會九州大會開催の予定あり、

更にブランデン氏再度の訪博の内諾あり、茲に資金獲得のため、第二回夏季大學を開く。聴講者九十余名。講義内容左の如し。

アーノルド・ベネット隨筆

ウオルポール「ザ・ダンス」

英 作 文

ラッセル科學隨筆

ゴールズワージー「インタナショナル・ソート」

オーヘヌリー短篇

中山 教授

前川助教授

長澤司書如

女專 森岡 教授

西南 石井助教授

一力特別研究生

獨 乙 文 學 (二十三年十二月以降)

一、中世獨乙文學研究の權威元京都大學講師、三高教授文學博士故雪山俊夫先生の御遺愛の書が本學名譽教授小牧健夫博士の御斡旋により雪山文庫(約六百八十冊)として三月二十三日當研究室を飾ることとなつたのはまことに記念すべきことである。古代中世のドイツ文學、語學關係の圖書のほか、古代ゲルマン族の神話傳說ゲルマン族に關するラテン文獻、中世英佛の文學、語學、その他、ゲルマン族の社會、政治、經濟史等の幾多の分野にわたる貴重な文獻が含まれてをり、研究室に精彩を加へてゐる。

二、富士川講師の「リルケ」が南風書房の新選詩人叢書の一巻として二十三年十二月十日に發行された。リルケ傳のまとまつたものがドイツにも、勿論日本にもまだ殆ど見られない今日永年の研究の一端を傾け、このすぐれた評傳を物されたことは

まことに喜ばしい。著者自身卷末に記してをられる如く、一層完全な評傳を完成する機會を望んでをられるが、その日の遠くないことを渴望して止まない。

三、日本獨乙文學會九州支部設立準備打合せの會が五月二十五日午後一時から當研究室で開かれ、九州、山口地區の大學高専から關係教授十余名參集され、發起人國松教授（九大）秋山教授代理（福高）富士川教授（佐高）司會の下に隔意なく協議打合せを終はり四時半散會した。なほ十月に設立總會を開催する予定である。

四、ゲーテ誕生二百祭の先驅として六月五日午前十時より久留米女子高講堂で、久留米醫大予科世界文學研究會を中心とする久留米市内大學高専共催の下にゲーテ祭が開かれ、國松教授（九大）の「眼を光たらしめよ」と題する文化講演が行はれた後、演劇「ファウスト」（明善高）音楽會、展覽會等が催され、五時盛會のうちに終つた。

五、六月二十六日、明善高校講堂で國松教授の「ゲーテと秩序の精神」と題する講演が行はれた。

中國文學（昭和二十三年度以降）

一、昭和二十三年六月六日午後一時より法文學部第七演習室にて第二回中國學會を開催、五高教授松本雅明氏（中國古代思想の抽象性について）廣島文理大助教授佐藤清太氏（東亞教育史の構想）九大教授日野開三郎氏（穀稻粟と米）の研究發表

あり。九大楠本月加田兩教授、山室助教授、廣島文理大池田末利氏、山口高校石黒後逸氏其他出席者約卅名

一、二十四年三月五日午後二時より第三演習室にて卒業論文發表會を行ふ。發表者山下通雄（中國古代思想について）黒木好江（李太白）

一、四月二十五日、筑紫郡牛頭村の竹田氏宅を訪れ益軒徂徠等の消息其他を觀る。

一、五月四日午後二時より第三演習室にて副手鈴木喜一氏の「支那學研究法について」と題する研究報告あり

一、五月卅一日午後二時半より第三演習室にて研究生荒木見悟氏の研究報告あり。題目「事と理の問題」

一、六月五日午後一時より工學部地下食堂にて影山講師並に新入學生の歡迎會を行ふ。

一、六月卅日午後一時半より第四演習室にて「紅樓夢について」と題する助手吉田幸夫氏の研究報告あり。

一、尙二十四年第一學期より影山講師の中國語初級並に高級開講さる

受贈雜誌

民間傳承

（民間傳承の會）

研究と資料

（神戸商科大學經濟研究會）

經濟月報

（大阪銀行調查部）

人文學 第一輯

國語・國文 第十七卷十號・十八卷二號（京都國文學會）

哲學研究

天の川

說林

天理大學學報

一橋論叢

心理學研究

立命館文學

(京都哲學會)

(天の川會)

(立命館文學會)

(天理大學人文學會)

(一橋論叢編輯所)

(日本心理學會)

(立命館研究所)

「文學研究」發行年月一覽表

第一輯	昭和七年三月	第二十輯	昭和十二年十月
第二輯	昭和七年十月	第二十一輯	昭和十二年十一月
第三輯	昭和八年二月	第二十二輯	昭和十三年三月
第四輯	昭和八年三月	第二十三輯	昭和十三年十月
第五輯	昭和八年七月	第二十四輯	昭和十三年十二月
第六輯	昭和八年十月	第二十五輯	昭和十四年六月
第七輯	昭和九年一月	第二十六輯	昭和十四年十二月
第八輯	昭和九年五月	第二十七輯	昭和十五年七月
第九輯	昭和九年十月	第二十八輯	昭和十六年三月
第十輯	昭和九年十月	第二十九輯	昭和十六年八月
第十一輯	昭和十年四月	第三十輯	昭和十六年十二月
第十二輯	昭和十年七月	第三十一輯	昭和十七年六月
第十三輯	昭和十年十月	第三十二輯	昭和十七年十二月
第十四輯	昭和十年十二月	第三十三輯	昭和十八年十二月
第十五輯	昭和十一年四月	第三十四輯	昭和二十年三月
第十六輯	昭和十一年七月	第三十五輯	昭和廿一年三月
第十七輯	昭和十一年十月	第三十六輯	昭和廿三年三月
第十八輯	昭和十一年十二月	第三十七輯	昭和廿三年十二月
第十九輯	昭和十二年五月		

文學研究筆者別索引
(筆者はABC順による括弧内は輯號を示す)

千代正一郎
獨逸的なもの (三三)

福田 良輔

奈良朝時代東國方言の成立について (上) (三七)

春日 政治

片假名交り文の起源について (一)

古訓漫談 (二) より (四)

高野山にて觀たる古點本 (一七)

宇治拾遺物語の一本より (九)

金光明勝王經註本一本の古點について (一四)

聖王帝續考 (二一)

古語藏御本中央堀羅經の字音點 (二三)

一八五〇年和譯の馬太傳 (三六)

片山 正雄

文學科學概説 (一)

國松 孝二
愛と憎しみ「ニーチェと古典文學」の一章 (三五)

運命への目覺め (三六)

小島 吉雄

明治初期の歌論 (一)

宗祇の晩年 (三)

新古今和歌集の選集態度と撰集事業 (五)

所謂石津本新古今和歌集に就いて (八)

連歌に於ける美的情調 (二・一三)

新古今歌風と註釋の問題 (一八)

春日博士所藏二十一代集中の新古今和歌集に就いて (二三)

後鳥羽院の御文學 (二五)

新古今集寫本に於ける選者名の頭書について (二八)

新古今集傳本考 (三〇)

わが國近世の運命悲劇 (三三)

見るに隨ひて (三四)

池袋清風の譯詩 (三五)

一奥の細道「覺書」 (三七)

小牧 健夫

ヘルデルリンのエトナ劇斷片 (二)

クライストの「公子ホムブルク」の問題 (六・八)

銀の鈴 (一一)

ゲーテの從軍記 (一五)

ヘルデルリンの半神觀 (二三・二四・二六)

菜花行 (二三)

クライスト隨想 (二八)

獨逸浪漫主義の諸問題 (三〇・三三)

正岡子規とレツシング (三三)

西芳寺の庭 (三五)

われもまたアルカディアに (三六)

小室 光弘

土と文藝 (三三)

前川 俊一

ワグネルのソールズベリーテインタイン旅行 (三七)

松 枝 英夫

鎧花縁の話——異國廻りを中心として (二六)

蝶々居士張俗 (二八)

葉天寧とその一家 (三〇)

醒世姻緣傳の話 (三三)

兒蘭本の隨筆 (三三)

金聖歎の面白さ (三四)

郭女英雄傳の面白さ (三四)

金聖歎の水滸傳 (三五)

謝恩 (三三)

森 永 隆

目加田 誠

嶺詞選釋(一三)
民國以來中國新文學(一四)

雅樂の附録詩(二三)
白樂天の附録詩(二三)

陳確の附録詩(二九)
詩經に於ける自然界(三八)

文心雕龍(三四・三五)
洛神賦(三六)

六朝文藝に於ける「神」「氣」の問題(三七)

永田 英一

ヴァイニーの哲學詩について(三三)
アンドレ・ミエニエ(詩人と市民)(三五)

スタール夫人「ルソーについての書簡」(三六)

中山 竹二郎

「貧者の友」ウイリアム・ラングランド(一)
イギリス中世の宗教劇(五)

イギリス古劇の詩形について(九)
チヨウサアと現代英語(一一)

散文韻律について(一九)
チヨウサアの於ける措辭的特徴について(二二)

ウエイリの英譯「源氏物語」(二四)
チヨウサアの生涯と性格(二七)

チヨウサアの二面性(三〇)
チヨウサアの巡禮の世界(三三)

「サ・ガウエイニと緑の騎士」について(三四)
メリデイスの詩について(三五)

チヨウサアの「トロイルスとクリセイデ」(三八)
ソオロウとその生活觀(三七)

成瀬 正一

十八世紀に於ける文藝サロン(二・三)

新舊兩派の文藝論争(七)
モンテニユと東洋の悟道(一六)
旅行報告書(一六)

野上 豊一郎

使徒瞥見(三五)
杉田玄白とその周囲の人達(一九)

小野 島行忍

リツ・カ・パンハ・スツタント(一一)
リツ・カ・パンハ・スツタント(一一・一二・一三)

梵詩漫語(二三)
梵詩漫語(二三)

草枕そぞろこと(三三)
梵語奈留別誌(三四・三六)

笹月 清美

天平八年の遺新羅使一行の歌(一三)
古事記の文藝的性質に關する認識の發表(一七)

本居宣長の成立過程を示す二三の傳本について(二六)
本居宣長の國語研究(二九)

小居宣長の國語研究(二九)
富士谷御杖の言語理論について(三三)

富士谷御杖の言語理論について(三三)

佐藤 通次

世界の劇性とゲーテの「ファウスト」(一)
雅歌の悲極性(八・九)

生・思・格と体験(一〇・一六・一七)
數・性・格と体験(一〇・一六・一七)

創・神・話と「親」の論理的構造(二二)
「生・神・話」の論理的構造(二二)

「起・人」の論理的構造(二五)
「起・人」の論理的構造(二五)

表現の二契機「見る」と「生む」と(二九)

文藝の志氣——「フアウスト」研究に寄せて——(三二)
歴史と形態變化——ゲーテ研究の一齣——(三三)

進藤 誠 一

「フイガロの結婚」とポーマルシェー(一)
ユーリエーヌ・ラビツシユの喜劇(六)
スクリーブの功罪(八・九・一)
コメディー・フランセーズの沿革(一四・一五)
十九世紀中葉以後に於ける佛蘭西風俗劇(一八・二五)
日本に於けるコメディー・フランセーズ(三三)
モリエールの結婚(二七)
マリヴオーの結婚(二九)
フランスに於けるイタリヤ人劇團の業績(三二・三四)
「ブリタニクス」から「五大力」へ(三三)
作者兼俳優(三五)
フランス最古の喜劇(三六)

高木 市之助

吉野の鮎(二七)
國見芳(三〇)
牡丹芳(三三)
玉島川仙媛(三五)
酒仙供養(三六)

田中 晃

表現の構造(一六)
万葉歌人の國家思想(一八)
行爲と哲學(二〇)
日本的現實主義と「ものゝあはれ」(二二)
生成の根據としての自然(二五)

豊田 實

日本に於けるシェイクスピア紹介の歴史(一)
英吉利漂流邦譯考(四)
芥川龍之介とエドガ・アラン・ポー(七)
基督教聖書和譯の歴史(一二)
故坪内博士の「英文小學讀本」(一二)

日本とシェイクスピア(二六)
日本に於ける英文法紹介及び研究の歴史(二〇)

俳句と英語(三三)
生活・文化の反映としての英語史緒言の一節(三六)
言語起源の問題——英語史第一部概観——(三九)
言語を通して見る英人祖先の生活——大陸時代——(三二)
人及作家としてのシェイクスピア(三五)
シェイクスピアの女性觀(三六)

山内 晋 郷

六朝時代の展望(二)
牟子問題の清算(四・五・六)
王鳴盛氏の佛典觀(一一)

矢田部 達郎

古語に於ける「てには」の意義(三三)

吉町 義 雄

「物類稱呼」——西國方言索引(一)
九州方言の特異性(二・三・五)
島津齊彬の「羅馬字日記」と長田穂積の「菊池俗言考」(七)
博多仁和加用語に現れた活用一段化趨勢(一〇)
日本語動詞現在形態論(一五・一七・一九・二二・二四・二六)
紫雲方書四段變格活用動詞分布相(二八)
山雲方書四段變格活用動詞分布相(二八)
施福多「日本文庫及日本文學研究提要」(三〇・三三)
埃都創刊「日本語辭書」(三三)
大和口上言葉集(三四)
上海刊行「日本語文典」(三五)
九州方言推量、打消助動詞活用分布相(三六)
「日本風俗備考」——蘭日會話(三七)